

# 栄養士養成課程の学生における 「箸」に関するマナーの認知度について

勝山 由美<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 鯉淵学園農業栄養専門学校 食品栄養科

(受付：2020年12月25日／受理：2021年1月27日)

**摘要：**栄養士の業務には「食育」活動がある。「食育」の一つとして、優れた食文化の継承を推進するための啓発や知識を普及することが挙げられる。本研究では、日本の伝統的な作法と結びついた食文化において「箸」に注目した。箸のマナーの理解や持ち方については、食文化を継承していく上で重要であり、栄養士として身に付けておくべき事項である。よって栄養士養成教育を行う上で、学生がどの程度「箸」に関するマナーを理解しているか明らかにすることは重要と考えた。そこで栄養士を目指している学生に対して「箸」に関する意識調査を行った。同様の調査結果が17年前に加藤らによって報告されており、現在の学生の意識とどの様に変化しているのか比較検討も行った。今回の調査結果では、箸のマナーで「迷い箸」の認知度が89.2%と最も高かった。しかし17年前のその認知度は100%であり、約1割程度低下していた。これは、食事内容の変化に伴い、箸のマナーを正しく教える重要性が薄れていることが一つの要因と考えられた。さらに箸の持ち方で「伝統型」の者は62.2%であったが17年前の報告では71.0%であり、ここでも低下が認められた。これは家族と共食する機会が減少し、食事の際に教わる機会が少なくなったことが要因として考えられた。これらの結果より、栄養士養成教育において「箸」に関するマナーの教育は重要性が増していることが示された。

**キーワード：**食育、箸のマナー、箸の持ち方、栄養士養成教育

## I はじめに

2005年に「食育基本法」<sup>1)</sup>が制定された。この法律は、「近年における国民の食生活をめぐる環境の変化に伴い、国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむための食育を推進することが緊要な課題となっていることにかんがみ、食育に関し、基本理念を定め、及び国、地方公共団体等の責務を明らかにするとともに、食育に関する施策の基本となる事項を定めることにより、食育に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって現在及び将来にわたる健康で文化的な国民の生活と豊かで活力ある社会の実現に寄与すること」を目的としている。そして基本的施策として第24条に「食文化の継承のための活動への支援等」という項目があり、その中で重要な役割を示すのが食の専門家である「栄養士」である。よって、栄養士養成教育を行

う上で、学生が優れた食文化継承のための基礎的な知識がどの程度身につけているかを理解することは重要であると考えた。

さらに同法の前文では、「食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである」とされている。そして幼児期は、身体の成長だけでなく、心の発達のための重要な時期であり、生涯にわたる望ましい生活習慣、とりわけ食習慣を身に付けさせる重要な時期であるとの考え<sup>2)</sup>や子どもたちに日本の食文化を伝え、幼児期から食習慣やマナーを身に付けさせるための指導を行うことは、伝承あそびを伝えていくことと同じように大切であるとの考え<sup>3)</sup>があることから子どもたちへの食育は特に重要であると言える。しかし、「箸が正しく持てない」、「箸が上手に使えない」など箸の使用行動に関する問題が小児、さらに成人にいたっても指摘されるようになっているのも事実である<sup>4)</sup>。この様な

<sup>1</sup> 〒 319-0323 茨城県水戸市鯉淵町 5965

問題に対し加藤らは、2003年に日本人の食事に欠かせない「箸」について栄養士養成課程の学生はどのような関心を持っているのか明らかにするため、「学生が普段使っている箸について」、「市場調査」、「箸のマナーについて」の3項目について調査し報告した<sup>5)</sup>。「箸のマナーについて」に関する調査で、当時の学生は「迷い箸」の認知度が100%であったのに対し、「しごき箸」・「涙箸」は20%前後であったことが示されていた。さらに箸のマナーを教えてくれた人は、87%が両親か母親であったこと、正しい箸の持ち方ができていない学生は29%であったことが示されていた。

そこで本研究では、食文化の継承において伝統的な作法と結びついた、食事をする時の「箸」に注目し、箸の使い方やマナーについて現在の栄養士養成課程の学生における「認知度」を明らかにすることを目的とした。さらに加藤らの調査報告（17年前）と今回の結果を比較し、「箸」に関するマナーについて認知度に変化があるのか分析したので報告する。

## II 調査方法

調査対象は、本校食品栄養科の1年生20名、2年生17名の計37名に行った。調査方法は質問紙

調査とし、質問項目は、「箸のマナー」、「箸の持ち方」とし、すべての間に対し1つ選ぶ方法で行った。箸のマナーについては、「寄せ箸・迷い箸・しごき箸・移し箸・刺し箸・探り箸・渡し箸・ねぶり箸・涙箸」の9項目について、「①意味まで正しく知っていた」、「②聞いたことがあった」、「③知らなかった」のいずれかを選択させた。さらに「誰から教わったか」、「栄養士の立場として箸のマナーを正しく教えないといけないか」とその理由を聞いた。箸の持ち方については、「箸の持ち方の調査図」を用い、図の中から一番近い箸の持ち方を選ぶ方法で回答させた（図1）。「誰から教わったか」、「栄養士の立場として箸の持ち方を正しく教えないといけないか」とその選択理由についても回答させた。なお、「箸のマナー」と「箸の持ち方」については、加藤らが調査を行った項目<sup>5)</sup>と同様の質問とした。

## III 結果

### 1. 箸のマナーについて

「箸のマナーと意味についての認知度」(図2)では、「迷い箸」が89.2% (33名)、「移し箸」が81.1% (30名)、「刺し箸」が81.1% (30名)と、80%以上の学生が意味まで正しく知っていた。しかし「しごき箸」は8.1% (3名)、「涙箸」は10.8% (4名)と意味まで正しく知っている学生は10%程度と極端に低かった。「箸のマナーを教わった人」(図3)では、「両親」が51.4% (19名)、「母親」が32.4% (12名)と多かった。「栄養士の立場として箸のマナーについて」(図4)の、「正しく教えないといけないと思うか」では(図4A)、「そう思う」が59.5% (22名)、「やや思う」が32.4% (12名)であった。正しく教えないといけないと思う理由としては、「食事におけるマナーの理解」が最も多く38.2% (13名)、次いで「常識として知っておくべき」が35.3% (12名)となった。一方、「教わる機会が少ない」11.8% (4名)、「食育の一環だから」14.7% (5名)と答える学生もいたが、「教わったことを伝えたい」と回答する学生はいなかった(図4B)。

### 2. 箸の持ち方について

「箸の持ち方」(図5A)では、正しい箸の持ち方である「伝統型」が62.2% (23名)であり、「伝統型以外」は37.8% (14名)であった。「箸の持ち方



図1. 箸の持ち方の調査図  
箸のいろいろな持ち方 ものと人間の文化史「箸」より

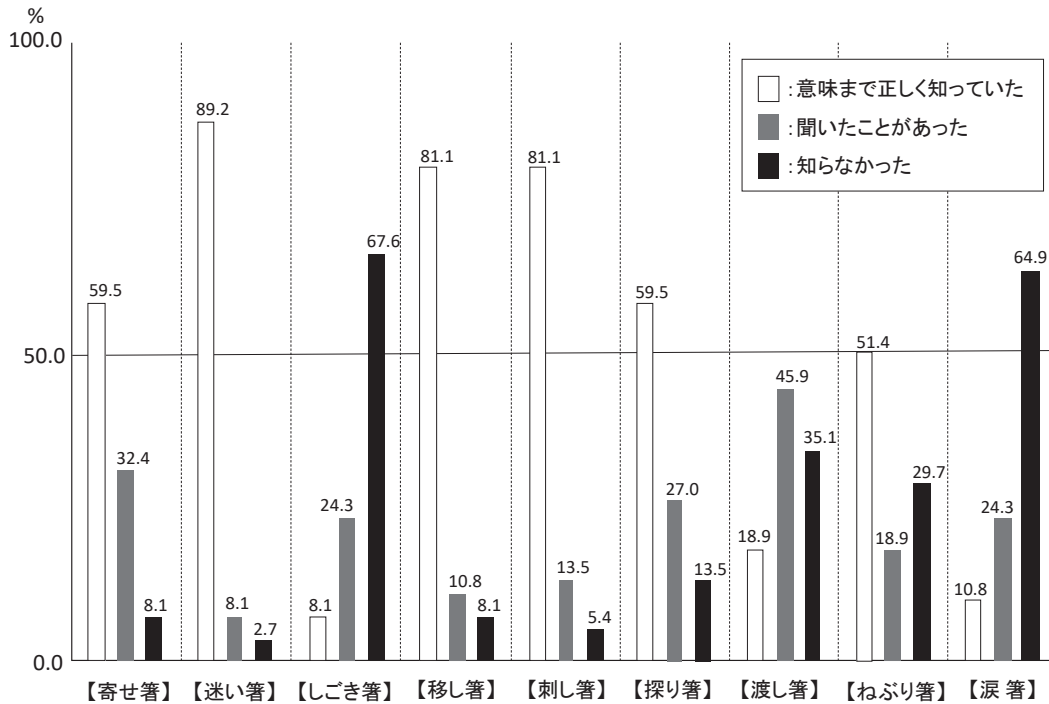


図2. 箸のマナーと意味についての認知度 (n=37)

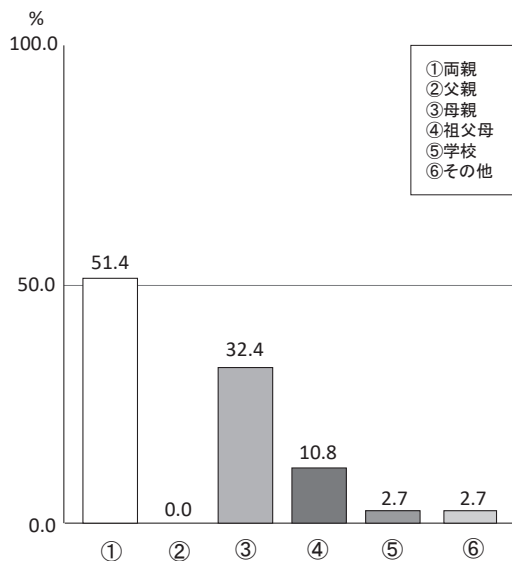


図3. 箸のマナーを教わった人 (n=37)

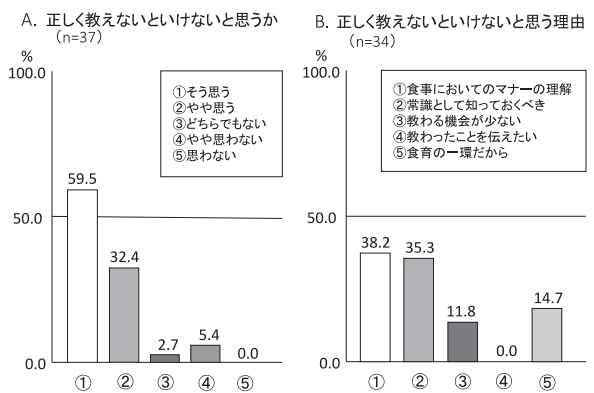


図4. 栄養士の立場として箸のマナーについて

を教わった人」(図5 B)では、「両親」が最も多く51.4% (19名)、次に「母親」32.4% (12名)であった。意外な回答では、「学校」2.7% (1名)、「その他」5.4% (2名)の中で「友人から教わった」(1名)があった。「栄養士の立場として箸の持ち方について」(図6)の「正しく教えないといけないと思うか」(図6A)では、86.5% (33名)の学生が「そう思う」もしくは「やや思う」と回答した。正しく教えないといけないと思う理由としては、「食事におけるマナーの理解」が最も多く59.4% (19名)、次いで

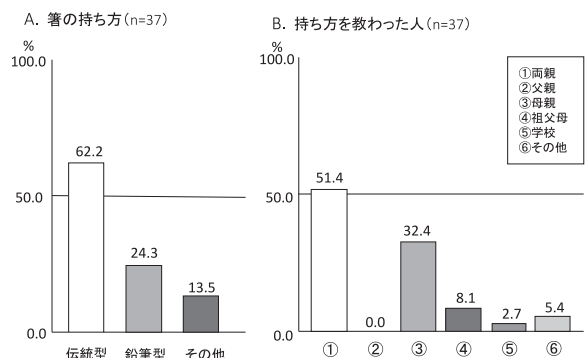


図5. 箸の持ち方について

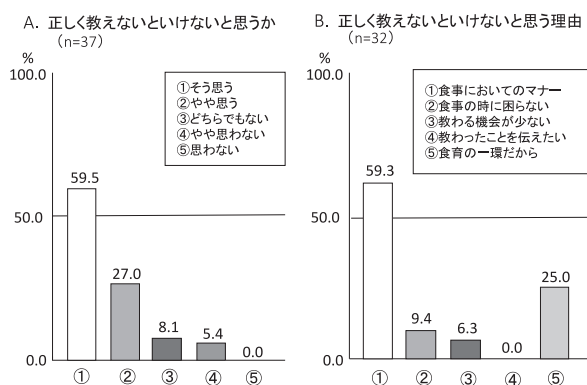


図6. 栄養士の立場として箸の持ち方について

「食育の一環だから」が25.0%（8名）となったが、「食事の時に困らない」9.4%（3名）、「教わる機会が少ない」6.3%（2名）と答える学生もいた。箸の持ち方も箸のマナーと同様に、「教わったことを伝えたい」と回答する学生はいなかった（図6B）。

#### IV 考察

##### 1. 箸のマナーについて

今回の調査では、意味まで正しく知っているとの回答が多かった「迷い箸・移し箸・刺し箸」は、動作から連想しやすいマナーであり、普段から意識している学生が多いため認知度が高かったと考えられた。それに対し知らなかったと回答が多かったマナーは、「しごき箸」と「涙箸」であった。「しごき箸」とは、割り箸を割った後に左右の手で箸をもち、ごしごしこすり合わせることであり、何気なく行う人も多くいるため、箸のマナーとは気が付いていないことが考えられた。また、「涙箸」は、食べ物を器から口に運ぶまでに汁をたらすことであり、汁気の多い料理を食べる時に気にしないとイケないマナーである。皿を持って食べる習慣があれば、汁をたらさず食べることができるため知られていないとも考えられるが、やはりスプーンなどの使用が一般的になっていることが知られていない要因と考えられる。よって「しごき箸」と「涙箸」は、学生において箸のマナーとしての認知度が低いことが分かった。

加藤らの報告では、「迷い箸」は調査した全員（100%）の学生が知っていた<sup>5)</sup>が、今回の調査で「意味まで正しく知っていた」と回答した者を「知っ

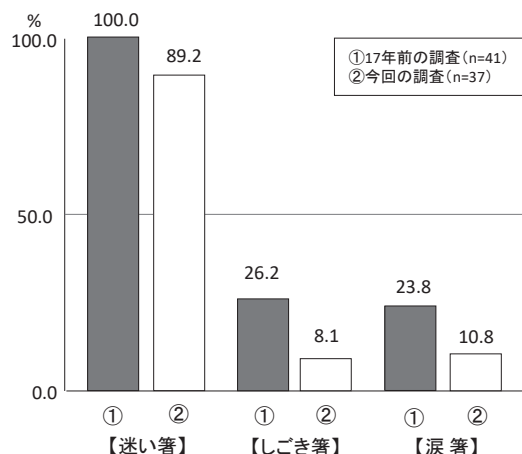


図7. 「箸のマナーの認知度」の比較

ている」とすると、89.2%という結果になり、17年前に比べ10%程度低下していることが明らかとなった（図7）。また、認知度が低い傾向にあったマナーの「しごき箸」と「涙箸」は、17年前の調査も低い傾向（20%程度）にあり、今回の調査でも10%前後と低かった。そしてここでも認知度の低下が認められた（図7）。「しごき箸」の認知度が低下した理由として、割り箸の使用頻度はあまり変わらないとすると、割り箸を割ったあと、気にせずこすり合わせている人が増加している可能性が考えられた。また加藤らは、「涙箸」の認知度が低い理由として、汁をばたばたたらすような食べ物を食べる時は箸ではなく、スプーンで食べるようになってきており、家庭で教える必要がなくなったことが「涙箸」が知られていない理由の一つと報告している<sup>5)</sup>。「涙箸」の認知度が更に低下した理由としては、17年前よりさらに汁気の多い献立では、スプーンを使用することが多くなったこと、給食などの食事を提供する際にも、箸とスプーンの両方もしくはその献立にふさわしい食具が用意されるようになったことが一因と考えられる。更に箸の使用頻度が低下していれば、箸のマナーを気にする機会が少なくなり、正しいマナーが伝承される割合も少なくなると考えられる。家庭で、食生活の変化に伴い箸の使い方が変わり、昔はたくさんあった「箸のタブー」も現代の食べ方に合わせ少なくなってきた<sup>5)</sup>ことから、箸のマナーを正しく教える機会が減少していると考えられる。同時に、マナーを知らない人であれば、正しいマナーを教えることが出来ないため、上手く伝承されない恐れがある。

マナーについて教わるのは、今回の調査で両親

が51.4%と最も多く、次いで母親が32.4%となった。家庭での食事の際に常に一緒に食事をする人が多いため、教わるが多いことが分かる。17年前の調査においても、約60%の学生が両親、次いで母親で27%となっていた。どちらの調査においても、多くは両親や母親から教わっていることが示されたが、今回の調査結果では、両親の割合が低下し、母親の割合が上昇していることが示された。これは社会・経済状況の変化による父親の食事時における不在や母子家庭の増加などが原因と考えられた。また、今回の調査で、「その他」の意見として、「SNSで指摘された」と回答があった。今後は、インターネット等の普及により、SNSで指摘されることが増えてくる可能性もある。見ず知らずの人が、マナーについて指摘していることに驚きも感じるが、認識してもらうためには1つの方法なのかもしれない。

「栄養士の立場として箸のマナーを正しく教えないといけないと思うか」という問については、91.9%の学生が正しく教えていく必要があると回答している(図4B)。理由としては、「食事におけるマナーの理解」、「常識として知っておくべき」と回答する学生が多くみられた。栄養士として食育に携わる機会が多くなることを考えると、家庭だけではなく、養成課程の講義・実習の中でも、正しく理解させること、食育の現場で利用できることを目標に講義内容に加える必要があると考えられた。

## 2. 箸の持ち方について

箸の持ち方は、正しい持ち方である伝統型の学生が62.2%と多いこと、両親もしくは母親から教わるが多いことが示された。伝統型の学生の割合が多かった理由としては、家庭での食事の機会が「箸の持ち方」を教える場として十分に機能していることが考えられた。今回の調査方法は、図を見て近い持ち方を選ぶ方法だったため実際の持ち方と誤差がある可能性も否定できない。よってこの点については、今後の検討課題である。

加藤らの報告(17年前)では、「箸の持ち方」について誰から教わったかを明確に聞いてはいなかった(「箸のマナーは誰から習いましたか」の問いのみ)。これは、「箸の持ち方」は「箸のマナー」に含まれるとしていたと考えられる。今回の調査では、箸のマナーと箸の持ち方の両方において誰から

教わったかを聞いたところ、箸の持ち方においても両親が51.4%、母親が32.4%と箸のマナーを教わった回答と全く同じ結果となった。さらに箸の持ち方について加藤らは、正しい持ち方とする伝統型が71.0%、鉛筆型を含め正しい箸使いをしていない者は29.0%であったと報告している<sup>5)</sup>。今回の調査では、伝統型が62.2%、そうでない者が37.8%であった。どちらの調査においても、伝統型の割合が多いことが示されており、家庭において正しい箸の持ち方を教えていることがわかる。ただ、17年前の調査に比べ、正しい持ち方の割合が約10%程度下がり、そうでない者が約10%程度上がっている(図8)。これは、両親の共働き等により、家族と一緒に食卓を囲む機会の減少<sup>6)</sup>が進み孤食の増加が背景にあると考えられる。孤食とは、一人で食事をする<sup>7)</sup>と定義されているが、一人で食事をする際には、食事中に箸の持ち方を気にすることはなく、また持ち方を注意されることもない。そのことが、今回の調査と17年前との比較で、伝統型の割合が減少している一因と考えられた。今後、箸の持ち方をどのような場面で教わったか等について調査し、箸の持ち方の教わり方・教え方を明らかにする必要があると考えられた。

一方、栄養士の立場として箸の正しい持ち方を教えないといけないと感じる学生は多いことが示された。理由としては、「食事におけるマナー」が最も多かった。食事において箸の持ち方もマナーの1つであると考えられる学生が多いこと、箸の持ち方を教える場が「食育の場」と考える学生が多いことが分かった(図6B)。

## 3. まとめ

今回の調査と加藤ら(17年前)の結果を比較すると、「箸のマナー」については、一番知られているマナーと知られていないマナーに変化はなかったが、その認知度は1割程度低下していた(図7)。また、箸の持ち方についても、正しい持ち方とされる伝統型の持ち方の割合も1割程度減少していた(図8)。箸の持ち方について今回の調査は、質問紙調査で行ったが、実際に箸を持たせる形で調査を行ってみると、伝統型以外の持ち方をしている学生が増える可能性がある。よってこの点については今後の検討が必要である。

本研究により、栄養士養成課程の学生において

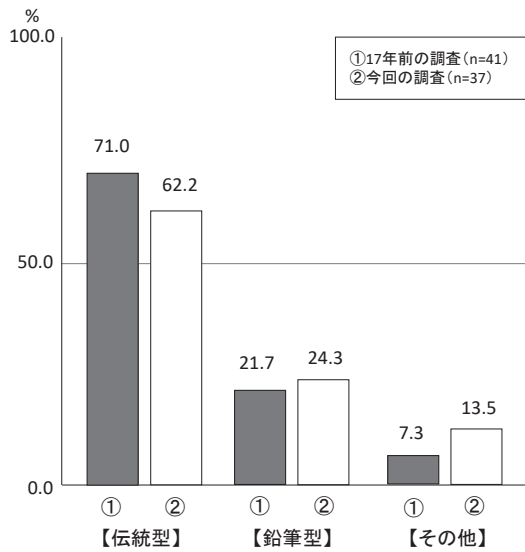


図8. 「箸の持ち方」の比較

「箸のマナー」等の認知度が低下傾向にあることが示された。栄養士は、正しい箸のマナー・箸の持ち方ができ、正しい知識を食育の場で示す必要がある。よって栄養士養成段階において、その知識を与える場を増やしていくこと、正しい知識を伝える方法を身につけさせる教育の重要性が改めて浮き彫りとなった。また、「食育基本法」の重要性を多くの人に伝えられる栄養士を養成することも重要であ

る。今後も箸のマナーや正しい持ち方の割合がどの様に変化しているのか調査していくこと、そして箸のマナーについて正しく教えられる教材の研究等を進め、日本の食文化継承に貢献できる人材養成について検討していきたい。

## V 引用文献

- 1) 農林水産省消費・安全局消費者行政 食育課 (2005), 食育基本法.
- 2) 大木 薫, 稲山貴代, 坂本元子 (2003), 幼児の肥満要因と母親の食意識・食行動の関連について. 栄養学雑誌 **61**: 289-298.
- 3) 保育所における食育研究編 (2004), 子どもかがやく乳幼児の食育実践へのアプローチ. 財団法人児童育成協会児童給食事業部 p.33.
- 4) 酒井治子, 足立己幸 (2002), 幼児の箸を使って食べる行動の発達的变化パターンと構造. 小児保健研究 **61**: 297-307.
- 5) 加藤和子, 橋内範子, 大嵐悦津子 (2003), 女子大生における箸に対する意識調査. 東京家政大学博物館紀要 **9**: 33-41.
- 6) 石井雅幸, 上島理歩 (2017), 子ども時代の孤食が大人になっての食への意識にどのように影響するのか. 大妻女子大学家政系研究紀要 **53**: 61-79.
- 7) 足立己幸 (2014), 共食がなぜ注目されているかー40年間の供食・孤食研究と実践から. 名古屋学芸大学健康・栄養研究所年報 **6**: 43-56.